

それまで過ごしていた山間部の村や街と違って成都は大都会だ。立ち並ぶ高層ビル、デパートに並ぶ最先端のファッション。排気ガスを吐きながらブンブン走る車、そして人、人、人…

私はまるで初めて都会に出てきた田舎者の気分だった。ほんの二週間前、東京というもっと大きな都会からこの国にやってきたとは思えないほど、都会に対して違和感を覚えている自分がいた。ひんやりとした山の中から下界に下りて来た私にとって、八月の成都の空気はじつりと蒸し暑く排気ガス臭かった。優しい人達のいる山の村が恋しくてたまらなかった。

しかし、本来12日間の旅程で取られた私のビザは15日間の短期滞在用のもので、旅を続けるのならば先ずビザの延長手続きを行わなければならない。手続きは公安で簡単にできるという事だったが、私が成都に着いた日は土曜日。月曜日まで手続きはお預けだ。更に宿の人に話を聞いたところ、手続きをしてもビザを受け取るのは4日後になるという。私は当分の間成都滞在を余儀なくされる事が判明したのだ。これはショックだった。なんと後一週間出発できない。

三国志の舞台であり、唐代の詩人杜甫にもゆかりのあるというこの街は、いたるところに名所や旧跡、茶館などがあり中国の文化に興味がある人にとっては楽しい街だろうと思えるが、山間部に暮らすチベット族に惹かれ心が逸っている私にとって一週間過ごすには退屈な場所だった。

結局ビザを待つ間、時間つぶしに他の土地に出かける事にした。

四川省には「中国人なら誰でも一生に一度は訪れて見たい場所」と言われている中国きっての観光地、九寨溝がある。私は基本的に観光地は好きではないが世界自然遺産にも登録され、その美しさの呼び声高い九寨溝にはかなり心惹かれていたし、九寨溝からバスで4、5時間ほどのところにある黄龍は、以前この地にツアーで訪れたという人のスナップ写真を見てその不思議な美しさに驚嘆し、それこそ「死ぬまでに一度見てみたい」と思っていた場所だったのだ。これはちょうど良い機会ではないか。

目的が決まるとチベットの山へと逸る気持ちも落ち着き、月曜日になるのを待って公安に向かった。ビザの延長手続きは簡単だったが、案の定受け取りは4日後だ。その足でバスターミナルに行き九寨溝行きのバスチケットを買い求めた。

九寨溝に向うバスに乗り込むと、私の席には既に先客が座っていた。「友達と並んで座りたいから席を替わってくれない？」戸惑いの表情を浮かべる私に、座っていた女の子が声をかけてきた。一人で来ている私は何処に座っても同じ事、そんな事ならお安い御用だ。



それがきっかけで目が合うたびに笑顔を交し合うようになり、何度も笑いあっているうちに親近感が生まれたのか、お菓子や果物などをわけてくれるようになった。些細な事だが私は嬉しくなってしまった。

私はかつてタイ国にしばらく滞在した事があり、『微笑みの国』との異名をとるタイではこのような事は日常茶飯事だった。私がすっかりタイにハマってしまい二年近くもの間タイに滞在した後、数年間自分でタイ料理店を営むまでになってしまったのも、元はといえばタイ人のこの気質に惹かれてしまったからだ。その頃の私は中国の事は何も知らなかったが、人の話を聞く限りでは殆ど良い話を聞いた事が無かったし、それに加えてかつて私がタイ料理店を営んでいた場所に集まってくる中国人は、お金を稼ぐためだけに日本にやってきたような人が殆どだった。つまらない事で口論となった事も一度や二度ではなく、「自分勝手にうるさい人達」というのが中国の漢民族に対して私が漠然と抱いていたイメージだった。そうで無い人もいるだろうという事は重々承知していたが、そうである人が私の周りには多すぎた。

そして、いざ中国に来てみても私は二度ともすぐにチベット圏の方に入り込んでいたので、普通の中国人と接する機会は今までほとんど無かったのだ。実をいえば、今回の一人旅をするに当たり「これまでの穏やかな国を旅するのは訳が違うだろう」と中国に対して構えているような気持ちも少なからずあった。それがどうだろう、ひとたび漢民族の中に入ってしまうと彼らも十分に人懐こく優しい国民なのだ。私は肩透かしをくったような気持ちで思わず苦笑してしまった。心の中で勝手に描いていた中国人に対するイメージが、彼女の笑顔によって崩れていくのを感じていた。この旅が楽しくなりそうな予感に胸がときめいた。

期待に胸を膨らませて訪れた九寨溝は、確かに美しかった。が、やはりものすごい観光地だった。中国の物価と照らし合わせれば法外ともいえる入場料、ゴールデンウィークの遊園地のような人出。いくら美しい湖でも背後にバス道路が敷かれ、ひっきりなしにバスの音が響く環境では白けてしまう。四姑娘山の雄大な自然の中で過ごしてきた私には、その美しさに素直に感動できる気持ちにはなれなかった。

しかし翌日向った黄龍は立派な観光地でありながらも、早めの時間に園内に入り人が少なかった事と、環境に配慮された遊歩道の作りで、その不思議な美しさを堪能する事ができた。観光地の風景は、美しい部分だけを切り取った写真で見たほうが実際より美しい場合もよくある事だが、黄龍の風景は写真で見ると何十倍も美しかった。まるで今にも天女が舞いおりてきそうな風景だ。極楽というものがあるならば、黄龍はまさに極楽の風景だ。今でこそ観光地となっているものの、この土地がまだ手付かずの自然の中にひっそりと存在していた時代にこの美しい渓谷を発見してしまった人は、どれほど驚いた事だろう。まさに神の住む場所として驚き、崇めてしまった事に違いない。そんな時代に何日間も、何時間も山の中を歩いて見に来たかったものだと思う。苦勞の末にそこまで来た者だけが見られる宝物のような場所。九寨溝や黄龍もそんな場所であって欲しかった。しかし現在の状態がどうあれ、このような自然が存在しているというだけで中国はすごい。本当にすごい。今までのイメージは何処へやら、私はすっかり中国の国土に対し尊敬のような気持ちすら感じ始めていた…。

黄龍からのバスは川主寺という街で終点だった。今日中に成都に戻るバスは無いので、今夜は

どこかに宿を取らなければならない。翌日の成都行きバスは川主寺から出るので、普通に考えれば川主寺バスターミナルの近くに宿を探すのが一番楽な方法だが、私はそこからタクシーで15分程の『松藩』という街が気になっていた。成都で滞在している宿におかれていた、宿泊客が書き残した旅の情報ノートに、「九寨溝、黄龍に行かれる方は帰りにぜひ松藩に寄ってみて下さい。とても良いところですよ」との記述があったのを覚えていたからだ。

松藩がどんな場所なのかは、例によって全然知らない。だが他の旅人が訪れて楽しかったと言っている場所に行かずに済ましてしまうなんて、私の好奇心が許さない。松藩まで行ってしまったら、明日の成都行きバスにどう乗れば良いのかも分からなかったが、そこに行っている旅行者がいる限りなんとかなる筈だ。とにかく松藩まで行くと決めた時にバスは川主寺に着いた。

川主寺から成都行きバスは朝の6時半と7時の二便だけだった。とりあえずバスのチケットだけは今日中に買っておいた方が良さだろうとチケット売り場に向かうと、同じバスから降りた何人かの中国人旅行者達もチケット売り場に集まっていた。

明日のバスにどう乗るのか解からず不安だった私は、隣にいた中国人の旅行者に話しかけてみた。彼等も今日は松藩に泊まり明日成都に向かうとの事だった。成都行きバスは川主寺を出た後に松藩を通るので、ここでチケットを買っておいて明朝路上で成都行きバスをひろえば良いと教えてくれた。

たどたどしい中国語で話しかけてくる私を頼りなく思ったのか「明日の朝、僕達と一緒にバスをひろえば良いよ」と私の分のチケットも交渉してくれたが、残念ながら彼等と同じ6時半のバスのチケットは既に売り切れ。私は一人で7時のバスに乗る事になった。

ともかくにも明日のバスにはなんとか乗れそうだし、チケット売り場で出会ったこの中国人の青年は優しそうなお人だった。広東省から兄と妹で旅行に来ているのだという。更に、一人で旅行しているという桂林の女の子も松藩に行くという事で仲間に加わり、4人で一緒にタクシーで行こうとバスターミナルを後にした。

田舎のタクシーにはメーターなど無いので交渉制だ。桂林女子のモーレツながらも可らしい値下げ交渉に広東兄妹と思わず目を見合わせて笑ってしまい、次の瞬間には4人共とても打ち解けた気持ちになっていた。

松藩に着くと自然と一緒に宿探しとなり、やり手の桂林女子と広東兄が路地裏にある素敵な民宿風の宿を見つけてくれた。一階は宿の人達の住居で、二階がお客さんを泊める宿になっている。建物自体は古く、質素な部屋ではあったが、磨きこまれた木の階段や木のベンチ。隅々まで掃除の行き届いた清潔な部屋。宿の主がこの家を大切に暮らしているのが伝わってくるようだ。私は一目でこの宿がとても気に入ってしまった。

しかも宿泊費はたったの10元だ。日本円にして150円。私は嬉しくてたまらなかった。1時間前には今日をどう過ごせば良いかも分からずにいたのに、今は素敵な仲間もできて、こんな可愛い宿に泊まれる事になるなんて、なんて幸運なんだろう。旅って本当に面白い。

宿の中庭ではおばあさんがのんびりと靴の中敷に美しい刺繍を刺していた。「え〜!? こんな綺麗な物を靴の中に引くの!? 私だったら額に入れて壁に飾るよ!」驚いて見ていると、広東兄が笑いながらおばあさんにその中敷を売ってくれるように頼み、「松藩の記念だ。日本に帰ったら額に入れて飾りなよ」と渡してくれた。まったく、誰が中国人は性格が悪いなんて言ったんだ〜!!

その時、宿のおじさんが盛んに何か話しかけてきた。広東妹によるとおじさんの言葉は訛りが激しく、中国人である彼らにも聞き取るのが困難であるらしかったが、何度も聞き返したところ「一緒に写真を撮ってくれ」と言っていたのだそう。おじさんの宿は目立たない路地裏にある為にお客さんが少ない。そこで旅行者と一緒に写っている写真を宣伝用に使いたいという事だった。事情が解かった私達は、宿のおじさんと一緒にうんと仲良さそうなポーズをとって何枚も写真を撮った。



宿に荷物をおろした後はすぐに松藩の街に出て、四人で街の中をぐるぐる歩き回った。ついさっき出会ったばかりなんてウソみたいだ。私達はまるで古い友人同士のように打ち解けて、一緒に写真を撮り、店を見て回り、あちこちの屋台で(桂林女子の活躍により)値切り倒しながら買い食いをし、食べ物屋を何軒もはしごして夜更けまで遊んだ。みんなずっと笑っていた。楽しくて楽しくてたまらなかった。このまま4人でずっと一緒に旅が続けられたらいいのになあ…。夜更けの街を歩きながら、そう思っていたのはきっと私だけではなかったと思うけど。

幸せな気持ちで眠りに着いたのもつかの間、ほんの数時間で目覚まし時計の音にたたき起こされた。松藩は回教徒の多い街だそうで、写真が趣味である広東兄の希望で回教徒の礼拝風景を撮影するため、私達は朝5時に宿を出て街の回教寺院へと向かった。

それは私の知っている玉ネギのような形の屋根を頂いたイスラム教のモスクとは大分赴きが違い、外見的には中国寺院のような木造の建物だったが、中では厳粛な雰囲気回教徒の礼拝が行われていた。

結局、異教徒が寺院の中に入る事は許されず写真撮影はかなわなかったのだが、そのピンと張り詰めた空気は、やはり異教徒が乱してはならない神聖な物なのだとも感じられた。またしても中国にやられた。私は松藩に来るまで中国人の中にも回教徒が居るという事さえ知らなかったのだ。日本の何倍もの国土を持つ中国は自然、民族、文化共一筋縄ではいかない。次々と思ってもよらなかったものを繰り出してくるのだ。

寺院の入り口に並んでいた回教徒達の脱いだ靴の中にはそれぞれ、広東兄が私に買ってくれたのと同じ様な美しい刺繍の施された中敷が入っていた。(続く)